

とうしん おうぎし  
東晋・4世紀／王羲之 (303? ~ 361?)

(教科書 26 ~ 29 ページ)



## 概要・特徴

王羲之の尺牘(手紙) 29通を集めた法帖(古人の書の名跡を石や木に模刻して拓本を採り、折本に仕立てたもの)。楷書の1通を除き、全て草書で記されている。古くから「書中の龍」とも称されてきた、草書の典型である。1通目の書き出しが「十七日先書」であることから全体を「十七帖」とよぶが、29通それぞれにも帖名がつけられている。教科書に掲載の部分は、始めの3行が1通目の「ちしばじょう 郗司馬帖」、続く4行が2通目の「いつみんじょう 逸民帖」、後ろ3行が3通目の「りゅうほじょう 龍保帖」である。多くは蜀(現在の四川省)の長官であった周撫しゅうぶに宛てて書かれたものと推定され、自身の近況報告や、相手を気遣う内容が記されている。

「十七帖」にはいくつかの刻本が伝わるが、教科書に掲載の拓本は、筆の運びがわかりやすく、温和で柔らかい書風である。文字の骨格がしっかりとしており、線の太細たいさいの変化がアクセントになっている。

## 作者について

王羲之(303? ~ 361?)は、東晋の官僚。琅邪臨沂(現在の山東省)の名門貴族の出身で、不安定な政治情勢の中、官途を歩んだ。草・行・楷の各書体において類いまれな才能を発揮し、その書は後世、多くの人々に規範として尊重され、「しよせい 書聖」とたたえられた。現在、その真跡しんせきは全て失われ、拓本や臨模が見られるのみである。

## 草書の成立・時代背景

草書は、前漢ぜんかんの時代に、篆書や隸書の速書きとして生まれた。手紙など日常で用いられたが、貴族文化が花開いた東晋時代には、王羲之によってその書法が芸術の域にまで高められた。

唐とうの第2代皇帝・太宗たいそうは、王羲之の書を愛し、広く収集したことで知られているが、「十七帖」も太宗が集めた王羲之の書を編集したもので、弘文館こうぶんかん(官立の学問所)で学生が学ぶ手本としていたことがうかがえる。